　令和三年十一月

漢詩鑑賞

**贈　殷　亮　　　　にる**

**日日河邊見水流　　　にをる、**

**傷春未已復悲秋　　をんでだまざるにたをしむ**

**山中舊宅無人住　　の　のむく**

**來往風塵共白頭　　にして　に**

【通釈】起句　毎日のように川のほとりで水の流れを見ては、時の過ぎゆ

　　　　　　　くのを思う。

　　　　承句　つい先き程、逝く春に心を傷めたかと思うと、はやまた、

　　　　　　　秋を悲しまなければならない。

　　　　転句　山深い故郷に残して来た旧宅には、もう住む人も無く、

　　　　結句　世間の俗事にまみれ、うろうろと奔走しているうちに、お

　　　　　　　互い白髪頭になってしまいましたねえ。

【語釈】　見水流　　水の流れを見る。論語・子罕の「、のにり

　　　　　　　　　てわく､くはくのき､をかず」が

　　　　　　　　　念頭にある。

　　　　　傷春　　逝く春をおしんで心を傷める。

　　　　　風塵　　風とちり。人の世。俗世界。俗事。官途などをいう。

　　　　　來往　　行ったり来たり。

【押韻】　平声、尤韻。流、秋、頭。

【解説】　戴叔倫（七三二－七八九）は中唐の詩人。

　　　　　（江蘇省）の人。に師事して学問にはげみ、門下随一とうたわれた。（江西省）刺史（長官）、容管（広西省）経略使などを歴任、実績をあげた。

　　　　　政治的手腕に優れ、又人物温和、その詩には幽遠の趣きがあると称せられた。晩年官職を辞して道士になろうとしたが、程なくして没した。

　　　　　この詩はその晩年の作、おそらくは官途にあっての心を許した友人の殷亮なる人物に贈ったものであろう。

　　　　　千数百年の時を隔てた現在でも共感出来る感慨をしみじみと詠じた佳作と云えます。

以上